

---

# 妖精の神が生きる道

ユナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖精の神が生きる道

### 【Zコード】

N1817Y

### 【作者名】

コナ

### 【あらすじ】

鉄骨につぶされて、転生することになった私。まあ、とりあえず一生懸命生きてみよう。あ、その前に修行だな。死なないためにも。当分フェアリー テイル関係ないです。ものすごい下手です。それでもいいという心優しい人は、読んで頂けるとうれしいです。

## 妖精の神が生まれる前（前書き）

下手な小説です。それでもいいという心優しい人は読んでくれると嬉しいです。

## 妖精の神が生まれる前

「危ない！！」

上から声が聞こえる。何が危ないんですか？そう聞こうとしたとき、何か大きいものが落ちてくるのに気がついた。鉄骨だ。避けなくては。頭では理解している。でも、怖くて動けない。逃げなくては。逃げなくては。

ドサツ

あ・・・れ・・？からだが・・・う・・ごけない・・・？

「女の子が鉄骨につぶされたぞ！」「誰か！救急車を！」

大丈夫。そんな簡単なことが言えない。なんで？なんで？そして・・・私は意識を手放した・・・。どこかに引っ張られるような感覚を持ちながら。

「あれ・・・？」

何故、感覚があるんだろう。私は死んだはずなのに。

「おー、起きたか。」

「だれ・・・？」

「俺はイーリス！神だ！よろしく！」

私は、とつとう頭がおかしくなつてしまつたのだろうか。それとも、この田の前にいる人間の頭がイカれているからなのだろうか。いや、きっとそつに違ひない。

「いや、違うから！お前の頭がおかしくなつたわけじゃないし、ましてや俺の頭がイカれてるわけじゃないから！俺、本当に神だから！」

「はいはい、それで、自称神が私に何のよう？」

意味がないとゆうことだけは、絶対にないだろう。

「自称じゃない！って、話がずれたな。話を戻そう。お前は、鉄骨でつぶされた。本当は、記憶喪失だけですんでいたはずだったんだ。しかし、お前は打ち所が悪く、死んでしまつた。そこで、お前にはフェアリー・テイルの世界に転生してもらひ。」

「え・・・、マジ？」

「うん。マジ。」

「フェアリー・テイルといつたら、私が一番好きなアニメじゃないか！」

「ああ、あと、そこで生きるための願いや質問は、いくらでも受け付けるぞ！」

「えーと、それじゃあね、カードキャプターさくらのクロウカード全52枚をまずちょうだい。」

「了解。あ、でもさあ、」

「何？」

「俺が出来る転生は赤ちゃんだから、これ、どう渡す？」

「ああ、それじゃあさあ、クロウカードを私の体内に取り込んで、能力系の魔法として使えないかな。ハッピーの「エーラ」みたいにや。」

「それなら可能だな。んじゃ、これ。」

「これ、なに？」

出てきたのは、透明な、グミみたいなもの。

「ああ、俺は、道具以外のものは、いつやって渡すことにしていろ  
んだ。」

「ふーん。ま、どうでもいいや。いただきます。」

「で、他に欲しいものは。」

「めんどういから一気に言つよ。念じたら、その通りのものが出来る  
能力。あと、治癒魔法。あと、フェアリー・テイルの世界での語学の  
知識と、様々な魔法に関する知識。あと、身体能力は、最高レベル  
にまであげといて。他には、アースランドで一番の魔力。そのまま  
じゃかなり危ないから、封印できる魔法もつけといて。あと、治癒  
のスピードを、格段に上げといて。それと、かなり正確な記憶力。  
それと、フェアリー・テイルのアニメの知識は、放送されるたびに頭  
に入れさせといて。そのくらいかな。」

「そのぐらじつて……。」

イーリスが、私をあきれたような目で見る。まあ、多すぎたかもし  
れないな。ま、いつか。

「ああ、あとおまけがもらえるぞ。」

「おまけ?」

「そ、おまけ。俺に会いたいと思いながらねると、俺に会える。」

「ふうん。でも、何でそんなものがいるの?」

「能力を変更したかつたりするだろ。その時のためだ。」

「ああ、あとさ、何で私の記憶つて、あやふやなの?」

「鉄骨につぶされたとき、軽い記憶喪失になつたみたいだな。」

「へえ。」

「ああ、あと、お前の名前と容姿、じつする?」

「名前はル工。名字はどうでもいい。容姿は田と髪の色は茶色。」

「了解。ああ、あと、これやるの忘れてた。」

「ああ、この透明なグミみたいなやつ、また出てきた。ま、食べよ。」

「食べ終わったみたいだな。それじゃあな。」

「バイバイ。イーリス。」

言い終わった瞬間、私から光りが発せられ、そのまま意識を失つた。

## 妖精の神が生まれる前（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました！

## 妖精の神が産まれたとき（前書き）

前にも壇して下手になつてゐ――――――！

# 妖精の神が産まれたとき

「うわあああああああああああん（ニッタリ）」

「生まれたわ！」

「生まれたのか！」

「おおじいちゃんがいます。元気な女の子です！」

「おれたちの廻前はレナ。レナはアーラスだ。

「あ～（へ～）プローラスって名字なんだ～」

THE JOURNAL OF CLIMATE

•  
•  
└

卷之二

「あ、イーリス！」

「あのな、ル工、俺、お前に謝らなくちゃいけないんだ。」

「転生の衝撃にお前が耐えられなくて、現実では眠り病みたいな状況になつてしまつてゐるんだ。」

「お前が産まれてから、2年と6ヶ月だ。」「…………！」

「すまん・・・。」

卷之三

「まあ、一念現実この

「うやう・・。」

「じゃねー。」

前みたいに光が出て、意識が遠のいてきた。

「ああ、あと、お前の近くに他の転生者が2人いるから~」

え・・・、おい

妖精の神が産まれたとき（後書き）

読んでくれた人、ありがとうございました！！

妖精の神が目覚めたあと（前書き）

矛盾している・・・

# 妖精の神が目覚めたあと

一川

この人にまさか…

- おゆみさん？

この世界のお母さん、すみません、あのぐそ神、今度会ったらた  
だじやおかんぞ。

「川エ！目が覚めたのね！」

お母さん

卷之二十一

「那我就是你的了。」

アーヴィングの「アーヴィング」

「どうも……御めでたし。」

「ありがとう。あのね、ルエ、あなたに、2人、紹介したい人がいるの。」

「へー、だあれ？」

「1人はあなたと同じ年の女の子。1人は、あなたの弟よ。」

「おどりーた?

おどろかない人がいたら紹介してよ。

・ その2人の名前は? 」

「弟がカイト・プローラス。女の子がティナ・ルミネーナよ。」

「ふーん。2人に会いたいな。」

「本当ー!? それじゃあ、今から会いに行きましょー。あ、でも、そ

の前に服をきがえましょ! ねー。」

「はーい。」

「それが、10年後に至上最強とったわれた妖精の神とホームメイトとの出会いでした。」

## 妖精の神が目覚めたあと（後書き）

「いいよで読んでくれたわ、ありがと」「やれこましー」

## 妖精の神と1人目の親友との出会い（前書き）

前よりは多少うまくできたかな・・・？

## 妖精の神と1人目の親友との出会い

洋服に着替えた私は、3つ隣の家に向かっていた。ティナとゆう名の女の子に会いに行く。同じ年らしいけど、精神年齢は私の方が上なんだよな・・・。仲良くできるだろうか。でも、その子が転生者だったらまだマシかな・・・(とゆう淡い期待をかけてみる。)と考えているうちに、着いたみたいだ。

「おじゃましまーす。プローランスです。」

「あ、いらっしゃい。おや、ルエちゃん、いらっしゃい!ティナ!ルエちゃんが遊びに来たよ!」

「はーい!」

そうやって来たの女の子は・・・

「(か、かわいい!)」

お人形みたいだった。マジで。

「初めまして。ティナ・ルミネーナです。」

「初めまして。ルエ・プローランスです。」

なんとなく、私に似ていた。そして、なんとなくこう思つた。

「(この子は、転生者かもしれない・・・。)」

「よろしくね、ルエちゃん!」

「こっちこそよろしくね、ティナちゃん!」

「あらあら、すっかり仲良くなっちゃつて。」

「ティナ、お部屋で遊んで来なさい。」

「わかった!ルエちゃん、お部屋にこー!」

「うん!わかった!」

――これが、妖精の神と1人目の親友との出会い。

## 妖精の神と1人目の親友との出会い（後書き）

感想、お願いします！

## 妖精の神と2人目の親友との出会い（前書き）

前の話と微妙に似ている・・・。

## 妖精の神と2人目の親友との出会い

「バイバーイ、ティナちゃん！」

「ルエちゃん、バイバーイ！また明日ー！」

すんごい楽しかった。何でだろうな。前は人と遊ぶより本とか読んでる方好きだつたんだけどなあ。

「ルエ、どうしたの？」

「ううん。ちょっとと考え事してただけ。」

「そう。それじゃあ、今からカイトに会いに行きましょうね。」

「はーい。」

ぽてぽてと歩いていたら家に着いた。「このビルの二階にいるんだりう。そんなことを考えているとお母さんがドアを開けた。

「さあ、ここよ。」

入ると、ベビーベッドがあつて、その中に赤ちゃんがいた。田をぱつちりと開けて、「なんだなんだ」みたいな感じで私を見ている。

「（あれ？）」何か、違う。

「どうしたの？」

「ううん。何でもない。」

——これが、妖精の神と2人目の親友との出会い。

## 妖精の神と2人目の親友との出会い（後書き）

読んでくれてありがとうございました！出来たら感想お願いします！

妖精の神のゆの口記（前書き）

おゆかの口記だ。

## 妖精の神の母の日記

×月+日  
今日、私の子が生まれた。名前はルエ・プローランス。女の子だ。どんな子に育つのだろう。将来が楽しみ。

×月 日  
ルエが産まれてから約1週間がたつた。一昨日の昼に寝てから、今日の夜になつても起きない。さすがに寝すぎだと思った私たちが医者に診せたところ、一種の眠り病だと言われた。治療法は分からないうらしい。いつ、起きるのだろうか。

月×日

あの子が眠つてから、約5カ月がたつた。近くに、ルエより1カ月遅れて産まれた女の子が引っ越してきた。ルエが起きたら紹介したい。ああ、あと、その子の名前はティナ・ルミネーナと言うらしい。

×月 日

あの子が眠り始めて丁度1年がたつた。まだ、目覚める気配は一に行かない。早く目覚めてね。

月 日

今日、ルエに弟が出来た。名前はカイト・プローランス。元気な男の子だ。この子には、眠り病にかかるたくない。それに、早くルエにも目覚めもらいたい。

月 日

今日、やつと、やつと、ルエが目覚めた。カイトは不思議そうな顔をしていたけれど。

ただ、何故、「ちょっとまでやー—————  
！！！」と叫びながら起きたのかしら。まあ、あの二人と仲良くして  
てくれればいいのだけれど。

妖精の神の母の口元（後書き）

ありがとうございました

## 妖精の神と2人の親友（前書き）

今回は、転生者3人をいつぺんに出しますよー・あ、イーリスも含めてオリキャラ4人か。

## 妖精の神と2人の親友

「イーリス？あの問題発言はどういうことかなあ？」

「ただいま、イーリス君に質問（？）をしています。

「ちゃんと説明します！だからその怖い笑いをしまってください。

「ちゃんと説明しろよ。」

「まずは、カイト・プローランスから。お前が転生して約1年と2ヵ月ぐらいかな。間違つてある少年を殺してしまつて「また間違つて人殺したの？」ほつといてくれ！！それで、あの世界に転生させた。」

「何で私の兄弟なわけ？」

「なんとなく。」

ドガツ 私の足蹴りがイーリスのおなかにクリティカルヒットした音

「もう1人の転生者は？」

「テ・・・・ティナ・ルミネーナです・・・。」

「やつぱりねえ。」

「え、きずいてた？」

「なんとなくだけどね。」

「「イーリス？どーしたの？つて、え！？」

後ろを振り向くと、2人のお人形さんがいました。チャンチャン

「『チャンチャン』じゃないから！ルエちゃん現実見て！」

「おお。何故に考えることが分かつた？」

「ティナは、読心術の能力をもらつたらしいからね。」

「ふむふむ。てか、君たち誰？」

「今更！？」

「おお、息ぴつたりだねー。」

ちなみに、今ここにいるのは私と、イーリスと、藍色の田と、ショートカットの藍色の髪を持つた女の子と、黒色の田と、少し長めの

黒色の髪を持つた男の子。

「まあ、今の感じから推測するに、藍色の子がティナちゃんで、黒色の子がカイト君かな。」

「正解。でも、ちゃん（君）はこらなこよ。」「

おお、またもや息ぴつたり。

「まあ、お茶でも飲んでゆつくり話やつよ。」「

「え、」「お茶とか飲めんの…？」

「うん。」

「と、ゆつわけで、イーリス、お茶とお菓子 や、こじー。」

後ろでイーリスが「俺がお茶入れんのーー！？」とかゆう叫び声をあげてたかも知れないけど、無視無視。まあ、お茶とお菓子だ

## 妖精の神と2人の親友（後書き）

次はみんなのもらつた能力や前世の名前などを説明させちゃいます  
よ！・・・たぶん。

**妖精の神と仲間達（前書き）**

区別がつかない！特に、ルエとティナの区別が・・・。

「おーしー。」ただいま、お茶とお菓子中。

「さて、さつきイーリスから聞いたと思つたが、僕とティナは転生者だ。姉さんも、そうなんだろう?」

「まあねえ。そう言えば、2人はどうして死んだの?」  
（イーリス）が間違つて殺したつてのは聞いたけどさ。」

「私は通り魔に刺されて。」

「うわあ・・・」

「僕は、重度の食中毒で。」

「げえ・・・」

「その口ぶり、初耳?」

「うん。死に方なんて興味ないしね。」

「ひどい!」

「そう言えば、姉さんは?」

「あれ?死に方興味ないんじゃなかつたつけ。」

「私たちのしか聞かないなんて、不公平じゃん。」

「そつか。私は、鉄骨につぶされて。」

「グロッ!」

思いつきり退かれた。

「ひどいなあ。2人のだつて、充分グロいじゃん。」

「そうだけどさあ。」

「あんた達、息ぴつたりだね。前世は双子か?」

「ううん。赤の他人。」

「ふーん。そう言えば、何でティナは考へることが分かるの?」

「読心術貰つたの。前にカイトが言つてなかつたつけ。」

「・・・そう言えば、言つてた。」

「はあ・・・。」

何よその、2人そろつたあきれ顔は。

「さあ、次は能力の説明と行こうじゃないか！」

「イーリス、どうからわいてきた。」

「——は本来俺の仕事場みたいなところなんだが・・・」

「私が貰つたのはカードキャプターさくらのクローカードやら何やら

じかんやう、詳しい話は「れ（イーリス）から聞いてください。」

スル! しないで! しかも、実行しないで! ト

いいじやん  
別に

一  
一  
モルモット  
一  
一

「ひどいっ！しかもカイトとティナまで！」

僕は、選択した魔法

「スルーすんなあ！」

「私は、水の造形魔法。」

「・・・・・・・・・・(泣)」

「イーリス、お茶お代わり。」

「あ、そーだ。2人の前世の名前は？私は、世崎友那。」

「ふーん。ティナは友那つて名前なんだ。

「僕は清木  
海斗。」

「カイトはそのまんまなんだね。」

「うん。考えるの面倒くさがったからね。

「へえ。私は、神田 神奈。」

「「固生約な前だな。

「うえ、2人とも。

ପାତ୍ରାବ୍ଦୀ

四庫全書

卷之三

賀辰  
丁巳年夏  
賀辰

「ああ、そろそろ帰つた方がいいぞ」

「なんて」

そろそろ夜明けたからな

「 「 「 それを早く言え！」」

「じゃーね、また夜にね。友那、

海斗。

」

そして、私たちは意識を失った。

そして、私たちは意識を失った。

## 妖精の神と仲間達（後書き）

次は、みんなのプロフィール書きたいなあ。

## 妖精の神の現実（前書き）

短い！しかも、プロフイールじゃない！

## 妖精の神の現実

「くわああああ。」

「あひ、ルH、おはよ。」

「お母さん。おはよ。」

あんまり寝た感じしないなあ。わしゃあ、一晩中話しこんでたんだ  
けど。

「あ、姉さんおはよ。」

「うむ。カイト、おはよ。」

「ああ、朝ご飯を食べましょ。」

「はー。」

～ティナモ～

「ティナー。遊びに来たよ。」

「あ、ルHとカイト。来ててくれたのー？」

「うん。」

「あ、ルHちやんにカイト君。ティナの部屋に行きましょ。」

「はー。」

「何するー？」

「じゃああ、かくれんぼは？」

「・・・ティナって意外と子どもっぽいんだね。」

「ほつとこじよーそれこそ、たまにこどもらし行动とらないと、  
お母さん達が心配するじやないー！」

「・・・』行動をとる』なんて言葉を使つてこる時点でも心配され

ると思つ。」

「ひどいよお・・・(泣)

「しようがないな。かくれんぼでいいよ。」

「やつた!」

「その代わり、鬼はティナね。」

「はーい。」

～かくれんぼ終了・夕方～

「ルエ、カイト、帰るわよー。」

「はーい。ティナ、また明日ー。」

「明日ー。」

## 妖精の神の現実（後書き）

読んでくださいって、ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1817y/>

---

妖精の神が生きる道

2011年11月23日17時46分発行